# Hospital & Clinic

天使 救急科 新設1年

# 25年度受け入れ1700件超に
## 病院救急車導入、救急救命士確保

札幌市東区の天使病院（大橋壮樹理事長、山本浩史院長・284床）は、2025年の救急科新設に続き、病院救急車を導入した。26年度には新たに常勤の救急救命士も確保し、質、量ともに救急医療の拡充を目指す。（住友徹平）

同病院は25年に救急科を新設、同時期に着任した江濱由松医師（44）が専従医となり、受け入れ件数は24年度1553件から25年度1758件に増加、応需率も90％近くに上昇している。救急医療の需要に応えるため、病院救急車導入とともに、今年度から救急救命士の採用を開始するなど、救急科の充実を進めている。

この1年間で救急受け入れ件数増加などの成果をあげる一方で、さまざまな課題も明らかになった。救急に対応する看護師は中央処置室の業務と兼任で、救急の初療も同様に中央処置室で行われている。現在使用している医療機器の更新時期も迫っている。「広く救急を受け入れているが、まだキャパシティが足りない。我々の受け入れ体制を広げることが重要」と江濱医師。9月からは救急専門医が増員され、救急救命士は来春までに10人程度を確保する計画だ。

病院救急車導入のメリットについて江濱医師は「患者が搬送されてから入院するまでの初療がスムーズになる。搬送時に医師、看護師、救急救命士が同乗して初療が行えるようになり、円滑な治療が可能になる」と期待を寄せる。

受け入れは専用ダイヤルで医師か救急救命士が直接聞き取りを行い、5分程度で折り返し連絡する方法を予定。現行の地域連携室を経由する方法よりも迅速な対応が可能となる見込みだ。

26年春から救急科の業務にあたる救急救命士の川端崇太氏（30）は、病院で業務に当たる救命士が増加していることについて「21年の法改正で、働ける範囲が拡大され、医師の指示の下で業務を行う以上、行える医療行為は今後増えていく」と予想。「病院救命士の認知を進めて、病院の救急に不可欠の存在になっていきたい」と意気込む。

江濱医師は「救急科が新設されるまでは院内の看護師が手探りで頑張ってくれていた。量はもちろん、救急医療の質も向上させ、いずれは小児・成人問わず患者を受け入れていく。まずは消防救急の負担を減らして、地域の二次救急を担う存在になりたい」と述べた。

江濱医師（右）と川端氏

導入された病院救急車

### 地域連携講演会で 積極活用呼びかけ

同病院は地域の関係者を対象とした地域医療連携講演会を開き、札幌市消防局東消防署の中村慎吾救急救命士（39）が市内救急の現状を報告した。

市内の救急要請件数は右肩上がりで、今年は12万5000件が見込まれている。これは政令市別で上位4位で、救急車1台当たり人口も5・3万人と、全国でも救急隊1隊当たりの負担が大きいという。

搬送患者の重症度割合は軽症者が46・9％と減少を続けているものの未だ最多で、中村氏は「軽症者が不適正利用というわけではないが、札幌市が提供する『緊急度判定サポートツール』や救急安心センター札幌（#7119）の周知が必要」と指摘した。

山本院長は「救急科開設から1年が経ち、これだけの数を受け入れているのは、現場看護師と職員が頑張った結果で、院内に活気が満ちている」とし、地域関係者に病院救急車と救急科の積極活用を呼びかけた。

---

恵佑会札幌 ロボット支援下で

# 門脈合併切除伴う膵頭十二指腸切除術

札幌市白石区の恵佑会札幌病院（高橋宏明理事長、久須美貴哉院長・243床）は、ロボット支援下で門脈合併切除を伴う膵頭十二指腸切除術を行った。国内でも先進的な術式で、合併症のリスクなし、抗がん剤治療への早期移行などのメリットを見込んでいる。

膵臓の背側には小腸や大腸からの血液を集め、肝臓に送る門脈があり、膵臓がんになると門脈へ浸潤しやすい。開腹手術では門脈を合併切除して再建する術式があるものの、ロボット支援による術式は確立されていなかった。

新たに試みた術式は、従来の開腹手術のように切断した血管を引き寄せて接合するのは難しいため、がんが存在する部分だけを最小限くり抜き、欠損部にパッチを当てて縫合・修復する。

欠損部にパッチを当てて縫合

手術の所要時間は8～9時間ほどで、森本守肝胆膵外科部長（52）が担当。門脈の血流を遮断するために、止めるべき全ての血管を一つひとつ剥離してクランプの準備を整えてから、遮断後30分以内で縫合・修復が求められる。森本部長は「長時間阻血すると、肝臓への血液供給が途絶え、血栓など合併症を招いてしまう。限られた時間で正確に手術を行う必要がある」と説明する。

ロボット支援下で手術を遂行することで、▼化学療法への早期移行▼体の負担が少ない手術創▼術後合併症リスクを大幅低減―などメリットは多い。これまでパッチによる再建4例、単純縫合4例、人工の管を補填する間置グラフト1例を実施したが、いずれも合併症はなく、無事退院できたという。

適用となる患者は年間10～15例ほどを見込む。

2025年4月の森本部長就任から膵臓・肝胆膵領域の外科診療を強化。多くの膵臓手術症例を積み上げ、就任から約1年4カ月で腹腔鏡下膵頭部腫瘍切除術（内視鏡手術用支援機器を用いる場合）の施設基準を取得した。

ロボット支援下の血管合併切除を伴う膵頭十二指腸切除術は保険適用外だが臨床研究として取り組んでおり、将来的な保険適用を目指す。森本部長は「手術が普及すれば、道内に限らず全国の患者にも恩恵がある」とし、「難度の高い手技を身につけるための若手医師への教育も行っていきたい」と話している。（工藤海斗）

---

No.2366

# 院長訪問

よりそう訪問診療クリニック
なぎの木（札幌市厚別区）
石部　正和 院長

## “リハビリ専門医の視点で 改善の可能性を見逃さず”

札幌市厚別区で内科・リハビリテーション科標榜の訪問診療クリニックを4月に開設した。リハビリ専門医で、「診察時は患者の話や意思を先入観なしに聞き、実際の動作確認を踏まえて、改善の可能性を見逃さないように心がけている」。

前職は道南勤医協函館稜北病院。在宅医療、回復期リハビリ、緩和ケアに携わる中で、「高齢や障害を理由に機能改善が見込めないと判断されがちな患者の中にも、リハビリを続ければ改善する可能性のある人はいる」と強調。リハビリ科の専門性を生かし、「地域の医療に貢献したい」と開業を決めた。

訪問リハビリの提供も行う。患者の歩行や他の動作が難しくなっても、食事、対話は「最後まで残るADLで、患者自身が生きる上での楽しみにつながる」と力を込める。

そのため、職員は看護師に加え、理学療法士、言語聴覚士、管理栄養士を採用。嚥下内視鏡検査の結果を基に嚥下訓練や食事形態の調整を行っている。

鍼灸院も開設しており、柔道整復師、はり師・きゅう師を持つ職員が対応。こむら返りなどに対し、西洋医学だけでなく、東洋医学も取り入れた包括的なケアを提供する。

訪問地域は厚別区全域と清田・東各区、江別市、北広島市の一部。

江別市出身。北海道大学2015年卒。35歳。

▼札幌市厚別区厚別東3条3丁目2―1

（高野玲央奈）

---

五輪橋整形外科

# メディカルフィットネス体操教室
## 楽しみながら体づくり

札幌市南区の五輪橋整形外科病院（佐藤直一理事長・95床）は、北海道体育文化協会と共催で、メディカルフィットネス体操教室を開催した。地域住民の健康増進のほか、交流を通じて職員の顔を覚えてもらい、来院のハードルを下げるのが目的。リハビリテーション専門職らが、体の使い方のポイントなどを解説しながら、参加者が楽しんで体づくりを行える運動メニューを実践した。

体操教室は全8回の6回目。ストレッチ、有酸素運動、体幹トレーニングなど、運動の楽しさを感じて体づくりもできる、さまざまなメニューを組み込んでいる。

初回と最終回は、運動器の障害で身体機能が低下していないかを測るロコモチェックを実施。結果を分析したデータを後日郵送し、教室の参加を通して運動機能の維持、改善ができたかを確認してもらう。

ＰＴ、ＯＴが体の動かし方や正しいフォームをサポート

トレーニングは、計8人の理学療法士、作業療法士が正しいフォームを伝えるなど、参加者に声をかけてサポート。参加者らは、職員や参加者同士の交流も楽しみながら、運動に取り組んだ。

今回が初参加という女性は、「家で運動を習慣化するのは大変だけど、（教室は）がんばってやってみようかなという気持ちになる」と前向きだ。

圓成興哉リハビリテーション科長（ＰＴ）は、「健康な体づくりをしてもらい、必要な時には病院に来てほしい。普段通院していない方も含め、体操教室をきっかけに顔見知りの職員が増えることで、患者が来やすい病院になれば」と期待する。

同企画は、2024年から年2回の頻度で実施。参加者アンケートで寄せられた希望も反映させ、内容の充実も図っている。今回は、同病院で柔道整復師として勤務しながら、デュアルキャリアで現役プロスキー選手としても活躍する、神谷来美氏による体操講座も盛り込んだ。

参加者からは「楽しかった」「運動してみようと思った」など好評と圓成科長。今後も教室を継続してく意向だ。

（森田碧海）


2026年版

# 北海道医療年鑑　診療所編

主要掲載内容

- 施設名　●住所　●電話　●FAX
- ホームページ　●メールアドレス
- 沿革　●病床数　●診療科目　●開設年月日
- 法人開設年月日　●指定医療機関
- 職員数（医師数を含む）
- 医師名（管理者以外）
- 事務長名（または責任者）
- 看護師名（または責任者）
- 管理者の略歴
- 施設の特色（訪問診療の実施状況等）
- 連携している病院・診療所
- 関連施設

全道の診療所
2,749施設収載

道内『診療所』の
最新基本情報・
診療機能の現況を
30保健所別、
市町村別に収載

好評発売中!!
購入お申し込みは
TEL.011-221-7777
まで

第42版　定価 14,300円（税込・送料別）
■B5変型判　■466ページ

■販売対象／道内の医療機関（病院・診療所）、医師、医療関係団体、介護・福祉施設等。お問い合わせください。
■各種企業につきましては、本書広告掲載企業のみとさせていただきます。
※ご注意／本書利用に際しては、個人情報保護法を遵守して、適切な取り扱いをお願いします。

北海道医療年鑑 病院編
■道内病院514施設の概要を完全収載
■経営主体別創立年掲載

好評発売中!!
■道内病院514施設ごとに医療従事者名簿、関連施設などを網羅
●2025年12月発行　●B5変型判・610ページ
●定価／16,500円（税込）　●送料別

株式会社 北海道医療新聞社
〒060-0042 札幌市中央区大通西6丁目（北海道医師会館）
TEL.011-221-7777　FAX.011-281-2678
https://www.medim.co.jp/